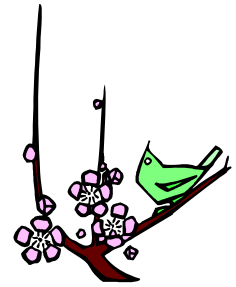


マルトミ です

2・3月号 (隔月刊)

日頃のご愛顧に心より御礼申し上げます。



お知らせ

- ☆ この冬も、豪雪といわれた昨冬を凌ぐような大雪となり、2月に入って高田地区では一斉除雪も行われました。皆様も除雪作業でお疲れのことと存じます。本当にご苦労様です。また、ここにきて除雪作業中の事故のニュースも度々伝えられています。とくに屋根の雪下ろしや、除雪機で作業される際にはどうかくれぐれもお気をつけ願います。
- ☆ 店舗ショールームを春の展示に模様替えしました。ホンダ、ヤンマーのミニ耕うん機を中心に展示し、あわせて店頭特価セールも実施中ですので、ぜひお立ち寄りください。
- ☆ 3月24日(土)・25日(日)、マルトミ春のスペシャルデーを開催します。農業機械、家庭用のミニ耕うん機・草刈機・発電機・電動カーなど豊富に展示するほか、来シーズン用の除雪機予約もお得な条件で承ります。どうかお誘いあわせてお出かけください。

マルトミカレンダー (2月～4月) 赤色は休業日

2月							3月							4月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4					1	2	3	1	2	3	4	5	6	7
5	6	7	8	9	10	11	4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14
12	13	14	15	16	17	18	11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21
19	20	21	22	23	24	25	18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28
26	27	28	29				25	26	27	28	29	30	31	29	30					

24・25日は春のスペシャルデー

◎ 2月は、休日でも降雪状況によって除雪機修理対応のため臨時営業致します。



株式会社 マルトミ

本社: 上越市西田中236-9(企業団地内)

TEL(025)524-1181 FAX(025)524-1184

E-mail: info@maru-takada.com

ホームページ www.maru-takada.com

家庭菜園の 耕うん・うねたて はおまかせ下さい。

家庭菜園は楽しいけれど、春の耕うんとうね立てはちょっと大変ですよ。そこで、そのどちらもラククきれいにできるミニ耕うん機とアタッチメントの組み合わせをご紹介します。

ホンダ・サラダFF300L + M型ヒッチ + グリーン培土器W

耕うん幅 45センチ。 3点セットでの通常特価162,100円

耕うんもうね立てもコツいらず力いらずできれいにできるので、初めて使われる方には一番のオススメ品です。

もっとパワーがほしいと思われる方には大型のFF500Lもございます。



ホンダ・ラッキー FU655L + ニューイエロー培土器(尾輪付)

耕うん幅 51センチ。 2点セットでの通常特価 229,400 円

パワーがあって 仕事はかどるうえ、一軸正逆転ローターにより危険な飛び出しもなく使いやすさも抜群です。大き目の畑をお持ちの方にオススメです。



ヤンマー・ポチMRT650RZ + ニューイエロー培土器(尾輪付)

耕うん幅50センチ。 2点セットでの通常特価 226,600円

農機メーカートップブランドのヤンマーのノウハウを詰め込んだ、一軸正逆転ローター付ミニ耕うん機です。培土器を使わずに本機だけでも簡単なうね立ができる便利な機能もついています。



ヤンマー・うね立てポチMRT650UV

耕うん幅50センチ。 通常特価 208,800円

他の一般のうね立のように培土器で溝を作るのではなく、耕うん爪を逆転させて土を左右に飛ばして盛ってゆく本格的なうね立のできる機種で、耕うん・うねたてとも本機だけでできアタッチメントは必要ありません。



他にもいろいろありますので、ぜひ店頭でご覧ください。作業機も各種取りそろえてあります。

なお、当社の販売価格には [お届け・試運転] も含まれています。



点検・修理もおまかせ下さい。

修理できずに お困りの機械はありませんか？ メーカー・機種を問わず、どんなことでもお気軽にご相談ください。

除雪機の修理で新聞・テレビの取材を受けました。

当社では、雪が積もった1月中旬以降、毎日除雪機の修理のご依頼を多数いただき、大忙しの日々を送っています。

そんな中で、先日は地元の新聞社とテレビ局から除雪機修理についての取材の申し込みがあり、ご覧くださった方もおられるかもしれませんが、2月2日の新潟日報と2月10日の新潟テレビ21で当社の活動の様子が報道されました。

雪の降り続く中での修理は大変と言えば大変ですが、対応が急がれる状況の中でうまく直ってお客様に喜んでいただけるのはとても嬉しく、やりがいがあります。逆に、ここにきて必要な部品がメーカー欠品となり、しばらくお待たせしてしまうケースも出ているのが大変申し訳なくつらいところです。部品が間に合わない場合でも、応急処置が可能なものは何とか使っていただけるように努力していますので、どうかご理解のほどお願い致します。



ヤンマー創業100周年の式典が行われました。

1月24日に神戸ポートピアホテルでヤンマー創業100周年記念大会が、翌25日には同所でヤンマー農機全国特販店表彰大会が開催され、当社も出席してまいりました。

100周年の式典の中で映像で紹介された、ヤンマー創業者の山岡孫七氏とディーゼルエンジンの発明者であるドイツのルドルフ・ディーゼル氏の関係に深い感銘を受けました。山岡氏は、恩人であるディーゼル氏が亡くなった後、その功績を後世に残すためディーゼルエンジン発祥の地アウクスブルク市に記念碑を寄贈しようと努力され、それが縁で、ヤンマーの国産ディーゼルエンジンが開発された尼崎市とアウクスブルク市が姉妹都市となって今も交流が続いているということです。本当に素晴らしいことだと思います。時代が違えばそれまででしょうが、特許を巡って企業同士が国をまたいでの訴訟合戦を繰り返している今の現実とはまるで別の世界の話のようです。



国産初HB型小型ディーゼルエンジンの模型

おなじみのヤン坊マー坊の天気予報もそうですが、こうしたエピソードからもヤンマーという企業の温かさが感じられました。

今年も1月6日にお祓いをしてもらいました。

今年も1月6日に直江八幡宮の宮司様に会社のお祓いをしていただきました。年明けのころは穏やかな日が続いたため、お正月は社員皆いつになくゆっくり休ませていただきました。のんびりと正月気分を満喫した後で、宮司様のすばらしくよく通る声で祝詞をあげていただくだけで、なんだか今年は良い年になるような気がしました。まあ実際、去年の日本の状況を思えばそれより悪いことなんてそうそう思い浮かべられませんし、きっと今年は良くなるはずです。社員一同そう思って元気で頑張りますので、どうか今年もよろしくお願い致します。



ヤドリギ 天と地を結ぶもの

1月中旬、国道253を松代から十日町へ抜けたときのこと、ナラ類らしき高木の梢に鳥の巣のようなものが見えました。何だろうと思い、近くへよってみるとそれはオリーブグリーンの葉の塊。ヤドリギだったのです。その名の通り他の木の枝に取り付いて養分をもらって生きる寄生植物ですが、自身でも葉緑素をもっており光合成を営んでいるところが変わっています。肉厚で節の多い短い茎の先に、やはり厚ぼったいプロペラのような形の濃い緑色の葉をつけ、ちょうど宿主が葉を落とした頃に、球形の小さな半透明の黄色っぽい色の実をつけるので、この季節になってはじめてその姿に気が付く……というのも面白いと思います。上越ではち



よっと山手のブナやミズナラ、シラカバなどの木に着いているのをよく見かけます。エノキやサクラなどにも寄生し、このあたり、どこにでもあってよい種類だと思うのですが、高田の市街地では見たことがありません。だれか観察された方がおられましたら教えてください。

実の中には鳥モチとして使われたというほどのガムのような粘液につつまれた緑色の種子が入っており、鳥がその実を食べたあと、嘴についた実を他の木の枝にこすり付けたり、糞と一緒に排泄されることによって子孫を増やす鳥散布型の繁殖をします。

その変わった姿は古くから注目されたようで、万葉集に当時越中の国司だった大伴家持の詠んだ歌、

あしびきの山の木末の寄生（ほよ）取りて

挿頭（かざ）しつらくは 千年寿くとぞ

は有名で、この植物にまつわる文章には必ずといってよいほど紹介されています。この「ほよ」はヤドリギのこととされ、意味は不明なもののホヨ、ホヤ、ヒョウなどの名はいまでも広く各地の方言として残っています。上の歌も、冬でも落葉しない緑を長寿の象徴として、それにあやかることを願ったものですが、同時に枯れ木から芽を吹く再生の呪物としての意味もこめられていた違いありません。さらにもっともっと昔には天と地を結ぶ不思議な植物として、ヨーロッパにおける民俗例のように、なにか信仰の対象とされた時代があったのではないのでしょうか。

東北地方では、冬の間の高価な家畜の飼料とされていましたが、飢饉などの際にはそのデンプンを含む茎葉をすりつぶして「ひょう餅」を作って食べたと書かれた本もあります。この「ひょう餅」は、どのようにして作ったものか、実態は良くわからなくなっているようですが、ただ飢えをしのぐだけ、けっして美味しいものではなかったことでしょう。

現在を生きる私たちは幸いにも「ひょう餅」を食べる必要はありません。でも、わが国でもわずか半世紀ちょっと前には、飢えが日常的なことがらだったということを忘れてはならないと思います。

(ハ)